

現代の ことば

川瀬 慈

羊の毛皮でできた半球型の帽子。全身を包むコトンのマント。旧約聖書を入れる、なめしたての牛皮でできたボシエット。そして野良犬を追い払うための木の杖。ゲフレが民家の軒先で祈りを捧げるとき、またあどけない顔をした10代前半の少年は、キリスト教エチオピア正教会の司祭の卵(現地の言葉で「コロタマリ」)である。

であろうか、人々の食べ残したインシエラ(エチオピアの主食)や豆類、ごくわずかな金銭を民家で受け取る。ゴンドールに44存在する正教会教会のまわりには、コロタマリたちが身を寄せ合って住む、草ぶきの簡素な小屋が立ち並ぶ。彼らはこの小屋を拠点に生活する。早朝から昼にかけて家々の軒先で托鉢。午後は小屋のまわりで聖書を読み、重厚で複雑な賛美歌を学び、

コロタマリ



暗唱する。先輩たちから出された試験を少しずつクリアし、司祭への階段を一步一步登っていかねばならない。「ウヘヨ、フオアルカ?(兄弟よ、元氣か?)」「イグザベリ・セツバ(神のおかげで元氣)」。現在は聖書の中や、正教会の儀礼や祈禱の場のみを用いられるとされる古

リットでは、若者たちのスラムで、互いの連帯を確認しよう。ゲフレはラスタシエン山脈の麓の農村で生まれた。敬虔な正教徒である両親のすすめで、ゴンドールの街にやってきました。コロタマリとしての生活を送るようになったという。彼が属するのは、バアタ教会。正教会の信仰の重要な柱である聖母マリヤをかかげた教会である。ここは特に、コロタマリ

の厳しい訓練の場を持つ教会として知られる。年間複数あるツォムと呼ばれる期間には、動物性タンパク質を避けるのみならず、起床後から夜半まで食事どころか、水を飲

むてとすら許されない。育ち盛りの少年たちには非常に厳しい修行で、ゲフレの仲間には、コロタマリとしての生活を送る者もいる。ゲフレはよく、托鉢の帰りに私の宿に立ち寄った。ある日コカ・コーラが飲みたいと言ってきた。今まで一度もコーラを飲んだことがなく、それがどんな味なのかとても気になるのだという。近所のカフェで、生ぬるいコーラを飲ませると、彼のふっくらとしたその頬は赤みを帯び、負いん気の強そうな張りつめた表情は微笑みでたちまち崩れた。次に出会ったときはスラムを飲み込んでいけと私にせがんで来た。教会を抜け出し、コロタマリを脱ぎ捨て、Tシャツ一枚になっ

て。これはさすがにまずいことを思っている、ゲフレの属するバアタ教会のコロタマリたちが3人、ゲフレを迎えにやってきました。しぶしぶ教会へと連れ戻されていく。ゲフレの後姿を見ながら、迷える人々に救いの手を差し伸べ、祝福の言葉を与える「魂の父」(エフセ・アバテ)となるであろう彼の将来の姿を想像してみるのである。

(国立民族学博物館助教、映像人類学・アフリカ研究)